

第1巻「言語学入門」演習問題の解答と解説

2013. 1. 15

●第1章「音の構造について－音声学・音韻論－」解答と解説

1.

(問題)

日本語の音節は子音と母音から成るということがよく言われますが、その母音は特定の環境のもとで無声化されることもあります。のど仏に軽く指先で触れるなどすると母音の発声の際の振動が分かります。母音で声門の振動があるはずのところが無声化されて振動が感じられないような事例を見つけ出して下さい。その上でどのような音韻論的な説明が可能かを考えなさい。

(解答・解説)

通常の場合において音節ごとに区切らずに指先をそつとのど仏の辺りあてて「桁」(けた)を発音してみる。アクセントは「た」におくこととする。この時二カ所においてのど仏での小刻みな振動が感じられる。「北」(きた)の発音では一カ所のみでその振動がある。同様に「蓋」(ふた)と「蓆」(へた)を発音してみる。ここでもアクセントは「た」におくことにする。「蓋」の「ふ」では振動は感じられないが「蓆」の「へ」では感じられる。ここで「/i/ と /u/ は無声化される」と仮定してみよう。「木田」(きだ)を発音すると「き」において振動は感じられ、さらに「札」(ふだ)の「ふ」においても感じられる。そこで仮説は「前後に無声子音がある場合 /i/ と /u/ は無声化される」と修正することとする。/i/ と /u/ は高段において発音されるので仮説はさらに「前後に無声子音がある場合高段母音は無声化される」と修正できる。NHKの『日本語発音アクセント辞典』では無声化される場所が破線の○で囲まれている。

2.

(問題)

アメリカ英語では子音字の t が /d/ や /l/ のように発音される弾音化という現象が観察されます。そのような事例を探し出し、どのような音環境で弾音化が発生しているか、音韻論的な説明を考えなさい。

(解答・解説)

VOA のサイト (<http://editorials.voa.gov/content/clinton-in-ireland-on-human-rights/1566761.html>) で米国国務長官 Hilary Clinton の音声を聴くことができる。下線を付した

5 個の語の /t/ に注意して聴いてみよう。

While religious freedom is a human right unto itself, this issue is about other rights, too – the right of people to think what they want, say what they think, associate with others, and assemble peacefully without the state looking over their shoulders or prohibiting them from doing so.

about と associate の /t/ は弾音としては聞こえてこない。これに比して prohibiting の /t/ は鮮明に弾音として聞き取れる。同一語の二つのトークン right については 1 個目の right の /t/ はむしろ弱く 2 個目の right の /t/ は明らかな弾音である。これらの事例から、「/t/ の左右に母音があり右側の母音にアクセントがない場合に弾音化される」といえよう。Praat (Boersma と Weenink による。 <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>) を利用しこれらの /t/ の音声波形をとると弾音の/t/は比較的短い時間幅で発音されていることが分かる。

3.

(問題)

調音点の同化は多くの自然言語で観察されます。そのような事例を収集し、どのような点が普遍的な部分となり、どのような部分が個別言語ごとに異なりうるのか、について考察しなさい。

(解答・解説)

日本語での典型的な事例は「本買う」や「本もらう」である。「本」の末尾の鼻音の調音点は次に来ている語の先頭の子音と同一である。したがって調音同化である。上記演習問題 1 においてふれた日本語の母音の無声化を惰性（発音のしやすさ、あるいは経済性）による同化と見なす考え方があることを窪菌(1999:43)は紹介している。英語では ten minutes や horse shoe, open [oupən oupm]において調音点同化が観察される。調音点同化については逆行的であれ、進行的であれ、歯茎音が標的 (target) になることが推測できる。Big Bird においても類似する現象が起こる可能性はあるが軟口蓋音 (/k g/) と両唇音は (/p b/) は同化を受けにくい、あるいは強く抵抗するということを Nathan (1984:310) は指摘している (... , assimilation of alveolars is generally unremarkable, velars require a little effort and labials are completely resistant to assimilation)。Hall (1992:193-99)は進行的鼻音同化の事例 (machen “do” [maxŋ], Lappen “rag” [lapm]) と逆行的鼻音同化の事例 (ein König “a king” [ainkø niç], ein Bauer “a farmer” [aimbauʌ]) をあげている。Mohanani (1993)は次のような原則を音韻部門の中心に配置し、いくつかの変数を連携させることで個別言語的な多様性を捉えようとしている。

In the sequence [+stop] [+cons] the two consonants must share a single place node.

無声音の同化が演習問題 2 において引用した Clinton 国務長官の発音において観察される。たとえば後半の *looking over* の [ŋ] は十分に有声化されているが、末尾の *doing so* の [ŋ] は部分的に無声化されている。これには後続する音が無声であるか否かが関係している。*tigers* では末尾の [z] は十分に有声化されているが、日本の球団の名称において末尾の摩擦音が有声化されることは希有である。さらにドイツ語では末尾の有声阻害音は無声化される (Berg “mountain” [berk] vs. Berge “mountains” [berkə]).

○追加参考文献

Hall, Alan Tracy (1992) *Syllable Structure and Syllable-Based Processes in German*, Niemeyer, Tübingen.

Mohanan, K.P. (1993) “Fields of Attraction in Phonology,” John Goldsmith (ed.) *The Last Phonological Rule: Reflections on Constraints and Derivations*, The University of Chicago Press.

Nathan, Geoffrey (1983) “The Case for Place—English Rapid Speech Autosegmentally,” *CLS* 19, 308-16.

●第2章「語の構造について—形態論—」解答と解説

1.

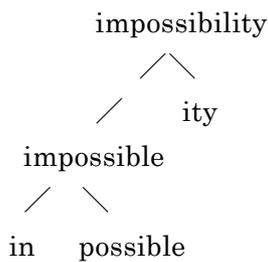
(問題)

impossibility (im+possible+ity) という単語の内部構造を、接辞添加の順序付けの仮説にしたがって説明しなさい。

***注意：2刷以降，問題を変更しています。**

(解答・解説)

in-はクラス I の接頭辞，-ity はクラス I の接尾辞で，クラス間の順序付けではいずれが先とも決定できない．そこで，接辞の下位範疇化の観点から考えてみる．両者はともに形容詞の語基に添加される．-ity を先に添加すると possibility という名詞が形成されてしまい，in-が添加できなくなってしまう．in-を先に添加すれば impossible となり，形容詞のままであるため，-ity の添加が可能となる．したがって impossibility の内部構造は [[im-possibil]-ity]となる．



***第2刷より，以下の理由で，2章の「演習問題1」を「impoliteness」に差し替えます。**

【impossibility で不適な理由】

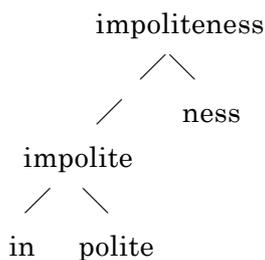
impossibility の例では接辞である，in(m)-と-ity は同じクラス I の接辞となるので，接辞付加の順序付けによる説明としては，説明が不明瞭となるので，例の入れ替えをします。

1. (2刷以降)

(問題)

impoliteness (im+polite+ness) という単語の内部構造を，接辞添加の順序付けの仮説にしたがって説明しなさい。

(解答・解説)



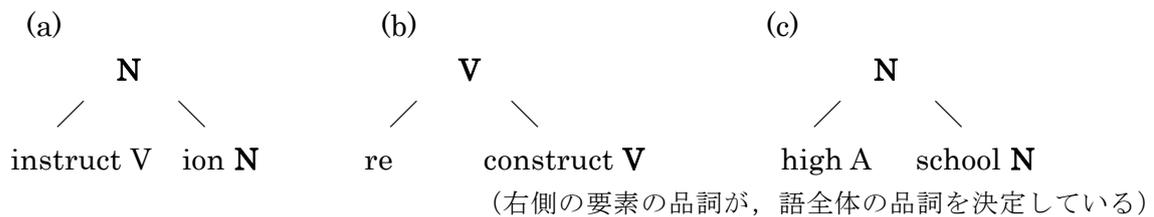
in(m)- はクラス I の接頭辞であり，-ness はクラス I I の接尾辞であるので，接辞付加の順序付けにしたがえば，まず in(m)- が polite に添加されて，impolite となり，これに -ness が添加されて impoliteness が生成されることとなります。

2.

(問題)

英語の単語で，右側主要部規則にしたがっている単語の例を挙げ，語彙範疇（品詞）や意味の変化について説明しなさい。

(解答・解説)



3.

(問題)

英語や日本語において，混成 (Blending) によって作られた単語を挙げ，それらの音声的な構造（例えば，音節構造など）についても注目しながら説明しなさい。

(解答・解説)

日本語と英語における混成語の音節・モーラ構造（英語では，右側の単語の音節数が，混成語の全体の音節数に一致しており，日本語では，右側の単語の音節数ではなくモーラ数が，混成語の全体のモーラ数と一致している。）英語の場合，一方の語の頭子音と他方の語のライムが結びつけられるのが基本である

English	(syllable)
a) sm (oke) + (f) og = smog	: 1 + 1 = 1
b) br (eakfast) + (l) unch = brunch	: 2 + 1 = 1
c) l (unch) + (s) upper = lupper	: 1 + 2 = 2

Japanese	(mora)	(syllable)
a) dasu (to) + (zoo) kin = dasu-ki-n	:	3 + 4 = 4 / 3 + 2 = 4
b) mama + (ai) doru = mama-doru	:	2 + 4 = 4 / 2 + 3 = 4
c) o + (si) ppo = o-ppo	:	1 + 3 = 3 / 1 + 2 = 2

(最後の, これらの例は, 渡部・松井(1997)「音声言語研究」藤本和貴夫・木村健治編『言語文化概論』大阪:大阪大学出版. pp.146-147 より一部引用)

●第3章「文の構造について－統語論－」解答と解説

1.

(問題)

(14)の句構造規則と(15)の辞書を使っていくつの文が作れるであろうか.

- (14) a. $S \rightarrow NP \text{ Aux VP}$
b. $VP \rightarrow V \text{ AdvP PP}$
c. $AdvP \rightarrow Deg \text{ Adv}$
d. $PP \rightarrow P \text{ NP}$
e. $NP \rightarrow Det \text{ N}$

- (15) this: Det, dog: N, will: Aux, walk: V, very: Deg
slowly: Adv, to: P, that: Det, fox: N

(解答)

16

1. This dog will walk very slowly to this fox.
2. This dog will walk very slowly to that fox.
3. This dog will walk very slowly to this dog.
4. This dog will walk very slowly to that dog.
5. That dog will walk very slowly to this fox.
6. That dog will walk very slowly to that fox.
7. That dog will walk very slowly to this dog.
8. That dog will walk very slowly to that dog.
9. This fox will walk very slowly to this fox.
10. This fox will walk very slowly to that fox.
11. This fox will walk very slowly to this dog.
12. This fox will walk very slowly to that dog.
13. That fox will walk very slowly to this fox.
14. That fox will walk very slowly to that fox.
15. That fox will walk very slowly to this dog.
16. That fox will walk very slowly to that dog.

2.

(問題)

(24)の句構造規則の()を取り除くといくつの句構造規則に展開できるか.

- (24) $VP \rightarrow V \text{ (NP) (AdvP) (PP)}$

(解答)

8

1. VP → V
2. VP → V NP
3. VP → V AdvP
4. VP → V PP
5. VP → V NP AdvP
6. VP → V NP PP
7. VP → V AdvP PP
8. VP → V NP AdvP PP

3.

(問題)

設問に答えなさい。

- 1) 次の束縛理論に基づいて(i)～(viii)の文法性を予測しなさい。下線部は同一人物を指すものとする。
- a. 束縛理論 (A) : 再帰代名詞と相互代名詞は、それを支配している最小の S か NP 内において、同一指示物を表す NP によって c 統御(c-command)されていなければならない。
 - b. 束縛理論 (B) : 代名詞は、それを支配している最小の S か NP 内において、同一指示物を表す NP によって c 統御(c-command)されていなければならない。
 - c. 束縛理論 (C) : 再帰代名詞、相互代名詞、代名詞以外の名詞句は、同一指示物を表す NP によって c 統御(c-command)されていなければならない。

(i) *John criticized John.

(解答) 主語の NP は目的語の NP を c-command している。したがって、束縛理論(C)に違反している。

(ii) *John thinks John is smart.

(解答) 主節の主語 NP は従属節の主語 NP を c-command している。したがって、束縛理論(c)に違反している。

(iii) John's mother thinks John is smart.

(John's mother の構造を[[John's]_{NP} mother]_{NP}と仮定しなさい)

(解答) John's の NP は従属節の主語 NP を c-command していない。また、従属節の諸語 NP は John's の NP を c-command していない。したがって、この文は文法的である。

(iv) *They believe each other is smart.

(解答) each other の NP を支配している最少の S か NP は, believe の従属節の S である。(They believe [s each other is smart]であるから。) その S の中で each other の NP は同一指示物を表す NP によって c-command されていない(なぜなら, そもそも従属節の S の中に each other と同一指示の NP は存在しないから)。したがって, この文は Binding Theory (A)に違反している。

(v) John saw Mary's picture of herself.

(解答) herself の NP を支配している最少の S か NP は, [Mary's picture of herself] という NP である。その中で herself の NP は Mary's の NP によって c-command されている。したがって, herself はこの場所で問題はない。Mary's の NP については, herself という NP によって c-command されていない。したがって, これも問題はない。したがって, この文は文法的である。

(vi) *John's mother hates himself.

(解答) himself を支配する最少の S か NP はこの文全体である。この中で himself の NP は John's の NP によって c-command されていない。したがって, 束縛理論(A)に違反し, 非文法的である。

(vii) His mother loves John.

(his mother の構造を[[his]_{NP} mother]_{NP}と仮定しなさい)

(解答) his を支配する最少の S か NP は[his mother]という主語 NP である。この中で his の NP は同一指示 NP によって c-command されていない(そもそも同一指示 NP が存在しないから)。したがって, his はこの場所で正しい。次に John を見ると, his の NP は John を c-command していない。したがって, この文は文法的である。

(viii) *Each other hates each other.

(解答) 主語の each other の NP を支配する最少の S か NP はこの文全体である。この中で主語 NP は同一指示 NP によって c-command されていない。したがって, 束縛理論(A)に違反し, 非文法的である。

2) (問題) (ix)の文が文法的であることは上の束縛理論にとって問題となる。なぜか。

(ix) Mary saw a picture of herself.

(解答) herself の NP を支配する最少の S か NP は, [a picture of herself]という NP である。この中で herself の NP は同一指示 NP によって c-command されていない(Mary の NP は herself の NP を c-command しているが, それは, herself の NP を支配する最少の S か NP の中にはないので関係がない。)したがって, 上の理論ではこの文は非文法的であると間違っって予測してしまう。

●第4章「文の意味について－意味論－」解答と解説

1.

(問題)

次の語の意味の違いを、「フレーム」と「焦点化」というキーワードを用いて説明せよ。

- (a) youth / adolescence
- (b) nervous / anxious / irritated
- (c) over / below
- (d) 来年度 / 次年度 の予定
- (e) 書道 / 習字
- (f) パパ / 父親

(解答例・解説)

(a) youth : 人の年齢をフレームとして踏まえて、単純に年齢の低いことを焦点化している。

adolescence : 人間の身体・精神的成長発達の段階(幼年期, 思春期, 成人期, 老年期など)をフレームとし, そのうちの思春期・青年期と呼ばれる年齢層(だいたい13才から20才過ぎ)に達した人を焦点化している。

(b) いずれも恐れや不安, 落ちつかなさなどの負の感情を持つ状態を焦点化しているが, そのフレームが異なっている。英英辞典などの定義を調べてみると, それぞれを用いる文脈状況(=フレーム)が異なっていることがわかる。

nervous : 自分がこれから経験することについて負の感情をもつというフレーム

anxious : 他人にこれから起こることについて負の感情をもつというフレーム

irritated : 何かすでに起きた出来事やすでに存在する人に対して負の感情をもつというフレーム

(c) 空間的な上下の位置関係という構図はフレームとして共通して踏まえているが, overはそのうちの上側を焦点化するのに対し, belowは下側を焦点化する。

(d) どちらも「基準となる年に続くすぐ後の年度」を表し, 焦点化される対象は同じだが, フレームが異なる。

次年度 : 基準となる年をいつでもよい任意の年とする, 客観的で第三者的視点での時間把握フレーム

来年度 : 基準となる年を「いま・ここ」として, 主観的で当事者的視点での時間把握フレーム

(e) いずれも「筆と墨を使って字を紙に書く作業」が焦点化されている。しかしその作業が行われる状況が異なる。「書道」は作品を作るなどの芸術的なフレームの中で、「習字」

は主に学生などによる書き方改善のための練習・勉強というフレームの中で、それぞれ理解される。

(f) どちらも男親を表すという点で焦点化されている対象は同じだが、「パパ」は家庭的でインフォーマルな家族フレームの中で理解される一方、「父親」は生物学的なフレーム(一親等の親族である)や社会的フレーム(養育権をもち家庭の維持や子の養育に責任をもつ)などのフォーマルなフレームの中で理解される。

2.

(問題)

次の下線部を引いた語は、どの意味を中心として、どのような意味拡張を起こしていると考えられるか。

- (a) 都会は夜でも明るい / 彼は明るい性格だ / 政治には明るくないので、わからない。
- (b) 服をハンガーにかける / アイロンをかける / お目にかける
- (c) He ran along the river. / He will run for the next year's election. / The mountains run from east to west.

(解答・解説)

(a) 「夜でも明るい」は文字通りの意味で用いられていて、光がさしていることを示しており、中心的意味である。それを人間の性格にメタファー適用すると「明るい性格」となり、特に曇りなく晴れやかで楽しそうなようすを意味する。また光がさして「明るい」と、そのメトニミー的副産物、結果として周りがよく見える。それを認識領域にメタファー適用し、「事情が理解でき、よくわかっている」という意味で用いたものが「政治には明るくない」である。

(b) 「服をハンガーにかける」が空間的な意味でありこの中では中心と考えられ、意味は「ハンガーの上にかぶせる・服の重みをあずけぶらさげる」という意味になる。「アイロンをかける」は「(衣類などの上にかぶせ重みを押しつけて)しわを伸ばす」という、もとの意味からその目的へとメトニミー的にずらした意味である。また「お目にかける」は目の前の空間(つまり視野)に差し出して視覚にとめてもらう、つまり見せる意味であり、メタファーを通じての拡張と解釈できる。

(c) He ran along the river.が基本の中心義。「足を用いて速い速度で移動する」という、文字通りの意味をもつ。これに対し、He will run for the next year's electionでは、「(車などを用いて移動して)選挙活動をする」の意味になり、字義通りの事態を行う目的の方に意味がずれているため、メトニミー拡張とみなせる。また The mountains run from east to westでは、速い速度で移動する存在が現実にはおらず、その事態を心に浮かべる人の仮想の視線があたかも山の稜線をたどっているかのようである。これは虚構移動という認知操作による意味拡張とみなせる。

3.

(問題)

次の文で前提として機能しているものがあるか、あるとしたらどの部分か.

- (a) It is surprising that Mary is married.
- (b) You may be forgetting that his lecture is boring.
- (c) (歯医者で) 次の予約は三ヶ月後になりますが、いつになさいますか?
- (d) 今度の日曜日, どのレストランに行きたい?

(解答・解説)

(a) that Mary is married の部分が前提. メアリーが既婚であることは真実として受け入れていて, そのことに対する態度表明 (驚き) をしている文.

(b) that his lecture is boring の部分が前提. 講義が退屈なのは自明のことであり, その事実を忘れていたのでは, と告げている.

(c) 次の予約をすることはすでに決まったこととして前提化されており, その上で「いつ」予約するかを尋ねている.

(d) (日曜日に) レストランに行くことはすでに了解済みで決まったこととして前提化され, その上で「どこの」レストランに行くかが質問の焦点となっている.

●第5章「文の運用について－語用論－」 解答と解説

1.

(問題)

チョムスキーが言語能力と言語運用を区別するために、言語運用上の問題としてどのような例を挙げていたか指摘せよ。

(解答・解説)

チョムスキー (Chomsky, 1965)は、言語運用上の問題が無い、つまり、妙なところや異様なところが無く発話される見込みが高い文を容認可能(acceptable)とし、反対に、奇妙だったり異様だったり、対応する容認可能な文があるなら発話が避けられる文を容認不可能な(unacceptable)文としている。容認可能性(acceptability)は、言語能力に属する概念である文法性(grammaticality)とは異なり、言語運用に属する概念である。文法的であるのに容認可能性が低い文として以下の例が挙げられている。

* Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press. (安井稔(訳)『文法理論の諸相』研究社, 1970)

(1) I called the man who wrote the book that you told me about up.

(2) The man who the boy who the students recognized pointed out is a friend of mine.

(1)は

(3) I called up the man who wrote the book that you told me about.

という容認可能性の高い文と同じく「私は、あなたが話してくれた本を書いた人に電話をかけた」という意味内容であるが、(3)と異なり、(1)では the man who wrote the book that you told me about という句が called the man who wrote the book that you told me about up という句の中に繰り返し込まれている繰り返し構文(nested construction)になっている。

(2)は「その学生たちが見たことがあるといった子供の指摘した男の人は、私の友達です」という意味内容であるが、who the students recognized という句が who the boy who the students recognized pointed out という句の中に埋め込まれている自己埋め込み構文(self-embedded construction)になっている。このような繰り返し構文や自己埋め込み構文は容認不可能性を助長すると指摘している。

2.

(問題)

関連性理論はグライスの会話仮説理論から大きな影響を受けて発生している。そもそもグライスの理論はそれ以前の語用論とどんな点で大きく違うのか、語用論の概説書を読んで簡潔にまとめよ。

(解答例)

グライス以前の語用論はコミュニケーションのコードモデル(**code model of communication**)を暗に前提していたといえる。つまり、メッセージの発信者が伝えたいことを符号化(**encode**)し、受信者はそのメッセージを解読(**decode**)することでコミュニケーションが成り立つと考えていた。それに対して、グライスは推論モデル(**inference model**)を提案したといえる。コミュニケーションは、発信者の発する発話の意図が、文字通りの意味だけでなく、言語的・非言語的コンテキストや世界に関する知識も利用し、推論を働かせて仮説(**hypothesis**)を形成しながら解釈されて成立するものであると考えた。グライスの語用論が会話仮説理論と呼ばれるゆえんである。